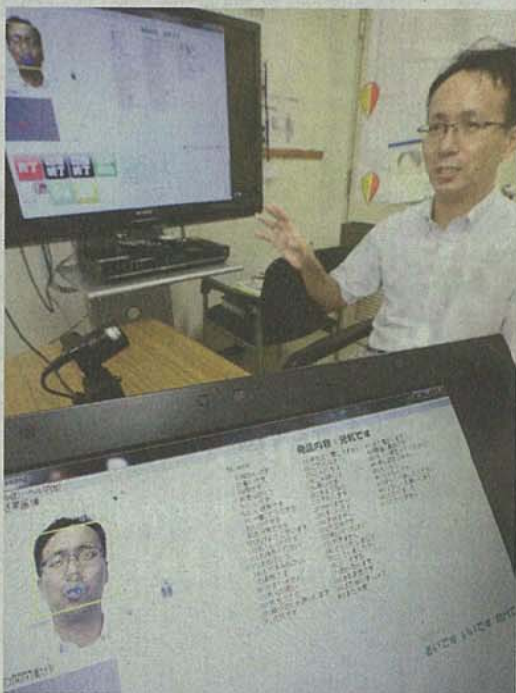


読唇術でコミュニケーション支援

斉藤・九工大准教授 システム開発



口元などのカメラ画像から会話内容を読み取るシステムを開発した斉藤准教授

単語、会話文を識別 実用化目指す

唇の動きから発言内容を読み取る「読唇術」を利用したコミュニケーション支援システムを、九州工業大学の斉藤剛史准教授（画像処理）が開発した。カメラに向かって話せば、事前に記憶させた唇の動きなどと照合し、内容を文章や音声で伝える仕組み。障害者の意思疎通の支援をはじめ、用途の拡大が期待され、11月に電気学会の論文誌で発表する。

（中村明博）

斉藤准教授は、会話時の「口が開いている割合や、口の動きを映像で登録。実際のカメラ画像と照合して内容を把握し、画面に素早く文字を表示した

り、音声に変換したりできる。

「声がよく聞こえません」「ゆっくり話してください」など、50の会話文を対象に、学生ら4人の画像で識別実験を行った結果、正答率は平均9割以上だったという。

斉藤准教授は「口の動きだけで意思を伝えられれば、聴覚や発話に障害を持つ人たちのコミュニケーションに役立つ。騒音が激しい場所での会話や、音声が消えた映像の会話復元などにも応用できる可能性がある」と強調する。

現状で認識できるのは唇などの動きを事前に登録した本人のみで、あらかじめ認識させた会話文にしか対応できないといった制約もある。今後は画像の識別や文章認識の精度を高めるなど、より使いやすいシステム

ムへと改良を図り、実用化につなげたい考えだ。